

Title	ゲルハルト・ベッカー著 一八四八年から一八四九年にかけてのケルンにおけるカール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルス：ケルン労働者協会の歴史によせて
Sub Title	Gerhard Becker; Karl Marx und Friedrich Engels in Köln 1848-1849, zur Geschichte des Kölner Arbeitervereins
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.11 (1964. 11) ,p.927(71)- 931(75)
JaLC DOI	10.14991/001.19641101-0071
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19641101-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

註(13) J. Johnston; *Econometric Methods*, McGraw-Hill, New York, 1963, pp. 148-295.

(14) G. Myrdal; *Economic Theory and Under-developed Regions*, London, 1957, p. 164.

Ⅶ 総括

すでに指摘したとおり、この論文は一九六〇年代のアジア低開発地域の経済成長と域内貿易の展望を目的としている。展望目的に沿って、①地域経済成長モデルと、②地域経済成長線型計画モデルを準備したが、計算作業の時間的制約から①の成長モデルの展望結果を示すにとどまり、②の線型計画モデルの計算結果は次の機会にゆずることにした。展望の結果によれば、アジア低開発地域一四カ国を合計した国内総生産は一九六〇年代に年率約四%の成長率で伸びることが期待できよう。この結果、域内貿易の規模も基準年次の一九六〇年に比べて拡大し、日本経済にたいする補完関係も強まることとなる。しかし、この地域の人口増加が年率二%を超えることを考えれば、この地域の一人あたりGNPの伸びは二%を下廻り、一人あたり消費支出ではかろうじて一・五%を上廻る程度となる。これは「国連開発の一〇年」の目標一人あたりGNPの伸び約三%をも下廻ることになる。かくして、アジア低開発地域と先進地域との発展較差は拡大傾向をたどるばかりか、この地域内部での各国の経済発展の較差が次第に顕著になるものと予想されよう。この傾向に対抗するために、将来の課題としてアジアの開発途上にある諸国間の域内協力の必要性が生ずるものとみられる。

付記 当論文の作成過程で本塾の山本登教授と福岡正夫教授の有益なコメントをうるとともに、電子計算機によるモデルのプログラミングと計算について三田電子計算室の杏掛曉氏等の協力をえた。この機会に関係者の協力に対して心からの謝意を表したい。ついでながら、この研究論文上のいかなる誤謬も筆者に帰すことは当然である。

書評

ゲルハルト・ベッカー著

『一八四八年から一八四九年にかけてのケルンにおけるカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルス——ケルン労働者協会の歴史によせて』

(Gerhard Becker; Karl Marx und Friedrich Engels in Köln 1848-1849, zur Geschichte des Kölner Arbeitervereins, 1963, Berlin, SS. 301.)

飯田 鼎

一八四八年のドイツ三月革命を中心とする社会運動史ないし労働運動史の研究は少なくない。つい最近の研究としては、シュトラウスの力作「十九世紀前半期におけるケムニッツの労働者の状態とその運動」(Rudolph Strauss; *Die Lage und die Bewegung der Chemnitzer Arbeiter in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts*, 1960, Akademie-Verlag, Berlin) や「ドイツ史の概説書であるオーブン

書評

七一 (九二七)

マンの著書が、(Karl Obermann; *Deutschland, 1815—1849, 1961, Berlin*)、あるいは、ハンス・モテックの「ドイツ経済史第二部」(Hans Mottek; *Wirtschaftsgeschichte Deutschlands, Ein Grundriss, Bd. II, Von der Zeit der Französischen Revolution bis zur Zeit der Bismarckschen Reichs-Gründung, 1964, Berlin*) など、この革命の前後の経済的背景としてのいわゆるドイツ産業革命史を克明に叙述しており興味深い。なお、ドイツ産業革命史の研究としては、ハンス・モテック、ホルスト・ブルンバーク、ハインツ・ウツスマー、ウォルター・ベッカー等の共著による産業革命史研究⁽¹⁾ (Mottek/Bimberg/Wutzner/Becker; *Studien zur Geschichte der Industrielien Revolution in Deutschland, Akademie-Verlag, Berlin, 1960*) は注目を浴びつつある。また、ホルン⁽²⁾のドイツ科学アカデミーの歴史研究所叢書の一冊として、「ドイツ労働運動の初期の歴史から」(Aus der Frühgeschichte der Deutschen Arbeiterbewegung, 1964, Akademie-Verlag, Berlin) というドイツ労働運動史研究の水準を示すすぐれた論文集が出されている。これは「⁽²⁾」(Herwig Förder; *Marx und Engels am Vorabend der Revolution*——*Die Ausarbeitung der politischen Richtlinien für die deutschen Kommunisten, 1846—1848, 1960*) を書いて、その力量を高く評価されたフェルダーが序論を書き、ウォルター・シュニッツト (Walter Schmid) による一八四四年六月のシュレジエンの織匠一揆に関する資料的な探求をはじめとして、ヘーメルホルト・ウォルフグラム (Eberhard Wolfgramm)、『ゲルハルト・フンタ (Gerhard Fuchta)

ペーター・バイエル (Peter Bayer) の共同労作としての、一八四四年から一八四八年までのザクセン州における鉄道労働者の闘争、カール・オーベルマンによる、一八四八年の革命に活躍した革命家にして医者カール・デスター (Karl Döster) の役割を追及した論文、いまここに紹介しようとするゲルハルト・ベッカーの、ケルンの労働者協会における共産主義者の宣伝的活動をあつかった論文などがのせられており、ドイツ労働運動史研究者にとっては有益なものである。また、この革命以前の黎明期のドイツ労働運動において、指導的役割を果たしたシュミットのウィルヘルム・ウォルフにかんする伝記的労作 (Walter Schmidt: Wilhelm Wolf, Sein Weg zum Kommunismus, 1809-1846, 1963, Dietz Verlag, Berlin) も魅力的な研究である。

以上、最近のドイツ民主共和国における一八四八年の革命を中心とする一連の労作について、筆者が入手し得たもののうち、代表的なものをあげたのであるが、これらに共通にみられる問題意識として、このブルジョア革命の不徹底の根本的理由の追求が秘められており、しかも社会主義的組織の視点から、その脆弱性という問題がうきぼりにされてきたことは注目に値する。ベッカーのこの労作も、ドイツの三月革命におけるマルクスとエンゲルスの活躍とケルンの労働者協会との関係を通じて、このブルジョア革命が、何故に不徹底に終らなければならなかったかを克明に分析している。筆者はこの著者の主張を紹介しつつ、内在的な批判を試みようとするものである。

- (1) この労作の内容についての紹介は、三田学会雑誌第五六巻第五号所収、拙稿書評参照。
- (2) これについては、三田学会雑誌第五十五巻第三号所収「初期マルクス研究におけるひとつの問題——フェルダー『一八四八年の革命前夜におけるマルクスとエンゲルス』における『真正社会主義』の解釈について」を参照。

二

つぎのような内容から成っている。

序論

- 一、ケルン労働者協会の成立と一八四八年六月までのその発展。
- 二、モルとシャツパーの指導のもとにおけるケルン労働者協会のマルクス主義的改造 (一八四八年七月から九月まで)。
- 三、マルクスによるケルン労働者協会の指導のひきうけと協会へのマルクス主義的解釈の完全な浸透 (一八四八年十月から十二月まで)。
- 四、ゴットシャルク・プリンツのグループの排斥と労働者協会の指導を通じてのマルクス主義的政策の一貫した継続 (一八四八年十二月から一八四九年三月まで)。
- 五、ドイツのプロレタリアートの革命的大衆政党の準備の場合におけるケルンの労働者協会の役割と、革命の終末に至るまでのその活動 (一八四九年四月から六月まで)。

この著者の問題意識の中心は、最初に、労働者階級の自然発生的

な共済的な組織であった労働者協会 (Der Arbeiterverein) が、ケルンの場合、いかにして政治的な目標をもつ意識的な団体に変形せしめられていったか、ということにすえられている。とくにドイツ三月革命における革命の中心地ラインランドの首都ケルンにおいて、マルクスとエンゲルスが、経済的な利益擁護という性格の強い労働者の組織を革命的労働者の組織に変化せしめようとした彼らの努力、その反対者との闘争、組織をあげての革命への参加などが克明に分析されている。

ところで問題は、ケルンのドイツ三月革命における地位の重要性である。著者によれば、ライン州の中心としてのケルンは、一八四〇年代に急激に人口が増加し、一八四六年には、人口八五、五〇〇人であったものが、一八四八年には八八、三五六人、そして一八四九年には九四、七八九人となり、ベルリンおよびブレスラウについて、プロイセン第三の大会会であった (S. 113)。十九世紀初頭におけるナポレオンによる占領の結果として、プロイセンにおける最先進地域となったラインランドでは、人口の増加は、主としてプロレタリアートの増加に負っていた。但し、そのプロレタリアートの数的増加は、工場労働者としてではなく——工場労働者の数は、一八四三年に一、四〇〇人、一八四六年にわずかに四、〇〇〇人にとどまったといわれる。しかしこの数字は実際にはあまり少なく見積られており、革命の危機以前の二、九七二名に達したといわれる (S. 113)。著者によれば、革命前のドイツのプロレタリアートは、機械制工業

に雇用されたのではなく、むしろ手工業、商業に従事しており、多くの手工業職人や小親方層が、一八四〇年代の半ば以後、資本主義的工業化の過程とともに、プロレタリア化していったといわれる。

著者は一八四八年のドイツ三月革命の原因を何に帰しているであろうか。ひとつは、すでに指摘したような手工業職人や小親方層の急速なプロレタリア化、従ってその窮乏化、そして第二に一八四七年の下半年期におこった世界的恐慌。そして第三にフランス二月革命の勃発これである。すでにマルクスとエンゲルスとは、亡命者の団体から発展した「正義者同盟」(Der Bund der Gerechten) を、「共産主義者同盟」(Bund der Kommunisten) と改組することに成功していた。一八四七年の夏、ケルンの共産主義者たちは、統一的な団体としての同盟団体 (die Bundesgenossen) を結成していたが、これはイデオロギー的に必ずしも革命的・共産主義的労働者の立場に立つものではなく、むしろ多くの市民の集会の指導権を握り、これによって、ブルジョアジーにたいして労働者および小市民階級の物質的利益を守るために闘ったのであり、その意味では、モーゼス・ヘスの流れを汲む真正社会主義の影響が根強かった。ダニエルス、ビュルガースおよびデスターなどのほかに、ウィリッヒ、アンネツケ、ゴットシャルク、ノートンクおよびヤンセン等がこの組織に参加していたが、フランスにおける二月革命の影響とドイツにおけるその影響、とりわけケルンにおける大衆運動の発展とともに、労働者をはじめて民主的な要求をかかげて運動に参加し、共産主義者は、その

運動の先頭に立つに至った。大衆運動が発展し、政治的危機が深刻化するにつれて、事態を憂慮した支配階級およびその手先機関——すなわち警察、政府および要塞司令官——は、軍隊による弾圧の手はずを整えつつあったが、一応危機を未然に回避するため、市議会議員は、三月三日、かなり自由主義的な要求を含む覚書きを発表した。これはひとつには、大衆の昂奮を鎮める効果を狙ったものであったが、ゴットシャルクは、市役所の前に集まった五、〇〇〇人の要求に応じて若干の他の人々と協議して、つぎのような請願書をつくった。

- (一) 著者によれば、人民の要求は、つぎの五つの項目にわかれる。
- (一) 人民による立法および行政、普通選挙権、地方公共団体および国家における普通選挙権および被選挙権。
- (二) 言論および新聞の無条件の自由。
- (三) 現存の軍隊の廃止および人民によって選挙された指導者をもつてする一般的な国民武装。
- (四) 自由な団結権。
- (五) 労働の擁護および万人にたいする人間的生活の確保。
- (六) 公費による全児童の完全な教育。

これらの要求のいずれをとってみても、みなブルジョア的なものであり、こうしたブルジョア的な要求と運動の視点が、ケルンの労働者協会の内部にゴットシャルクによってもちこまれ、その運動の方針として強調されたところに、労働者協会の問題があるのである。本書の著者が主として追求しているのは実に、労働者協会のヘゲモ

ニーをめぐるブルジョア民主主義とマルクス主義との闘いである。以下この点に焦点をあわせて追求してみよう。

労働者協会を政治的・革命的な団体、労働者階級を訓練し、組織してプロレタリア革命の達成に役立たしめるため、あくまでも階級的・社会主義的な機関としてマルクスとエンゲルスは意図しようとしたのに反し、ゴットシャルクは、労働者協会をもって、職別労働組合たらしめようと努力した。すなわち、あくまでも労働者の日常的・経済的な闘争に協会の性格を限定し、マルクス主義的政治闘争の具にすることに真向から反対した。著者は、ケルンの労働者協会のヘゲモニーの掌握をめぐる問題から出発し、マルクスとエンゲルスおよびその他の革命的な人々が、いかにしてケルン労働者協会から、ゴットシャルクの経済主義的なし日和見主義的イデオロギの支配を排除し、それを革命的な労働者の政治的運動の拠点たらしめたかを、新ライン新聞の豊富な引用のもとに実証的に分析している。

内容の充実した本書をよみ終って感ずることは、マルクスとエンゲルスの一八四八年の革命における偉大な役割については十分に追求されており、まことに読みごたえのある本であるが、ひとつの大きな問題は、著者が、マルクス・レーニン主義の立場から、マルクスおよびエンゲルスのケルン労働者協会を中心とする革命的闘争の意義を強調するあまり、労働者協会のもう経済的闘争のもつ側面を不当に低く評価している傾向があることである。たとえば著者は、「ケルンの労働者協会の組織的建設」という一節において、つぎの

ようにいう。「ケルンの労働者協会は、一八四八年三月以後に新しく建設された労働者協会の多くと同じように、職種を基礎として (auf der Grundlage von Gewerken) 組織されていた。こうした構成は、労働者の加入を促進したが……労働者や手工業職人をして、一方的に経済的な改善の闘争のみにかりたて、政治的な闘争へのひきいれを阻止した」(S. 28)。要するにゴットシャルクの影響のもとに、労働者協会は、極端に経済主義的であり、日和見的であったというのが著者の主張であるが、問題は、労働組合としての労働者協会の役割が不当に無視されていることである。すなわち、労働組合本来の目的としての日常的経済闘争の側面と、資本主義社会の打倒に終局的につながらなければならない政治闘争との結びつき、その接点に立つのが、労働者協会であるという認識が全く欠如している。それは、のちに、シュテファン・ポルンによって展開される一八五〇

この時期とそれから十五年後の第一インターナショナルの頃ではいぢるしい変化があったことを著者は指摘していないし、何よりも、マルクス主義形成史という歴史的な視点からの、マルクスとエンゲルスの活動の評価という点においてきわめて不充分であり、労働組合運動は革命運動にマイナスの作用をなすものであるという経済闘争と政治闘争との機械的分離論におちいっていることは遺憾である。

一八四八年の革命において、労働者協会がどのような役割を果たしたかは非常に興味ある問題であり、またむずかしい問題でもある。それは、現代における労働組合運動と共産党との関係という今日の重要な課題にも大きな示唆をあたえるであろう。この点については、いずれかの機会にまとめてみたいと思う。(Ritten und Loening, * 3, 760)

M・ベナル

『ラプルールの動静』

——十七世紀パリ南域の事例——

渡辺 國 廣

大体、本書の著者の基本的な誤謬は、一八四八年と一八四九年のいわゆる「若きマルクス」時代の彼らの戦術を、絶対無謬視していることである。労働組合運動そのものについて評価においても、

【始めに】十七世紀にはブルジョワによる土地の集積が目立つ。彼はこの過程のなかでフェルムを構築、それを単位に賃貸すること